

小学校 社会

社会的事象の意味を考え表現する力を育てる社会科学習の在り方  
－ ICTを活用した授業実践をととして－

産業教育課 研究員 白戸 一也

要 旨

小学校社会科において、社会的事象の意味を考え、表現する力を育てるためのICTを活用した指導法の研究を行った。調べたことをプレゼンテーションソフトでまとめたことにより、新聞作成より時間短縮や書き写す作業の軽減が図られた。そのため、発表や話合いの時間を設定することができ、調べ学習と発表を生かした根拠や解釈を示しながらの話合いにつながる事が示唆された。

キーワード：小学校 社会 社会的事象 ICT プレゼンテーションソフト

I 主題設定の理由

「平成26年度学習状況調査実施報告書」（青森県教育委員会）小学校社会の下北管内の結果を見ると、評価の観点別で社会的な思考・判断・表現（設定通過率62.4%に対して45.1%）に課題があることが分かった（表1）。社会的な思考・判断・表現は、小学校学習指導要領（平成20年3月告示）の5学年社会の目標の「社会的事象の意味について考える力、調べたことや考えたことを表現する力を育てるようになる」の部分である。この目標を実現するために、小学校学習指導要領解説社会編（平成20年6月）では、「5学年の内容全体の指導を通して、我が国の国土や産業に関する社会的事象について、学習問題に即して具体的に調査したり、地図帳や地球儀、統計などの各種の基礎的資料を活用したりして調べることができるようにする必要がある。また、調べたことや社会的事象の意味について考えたことを、根拠や解釈を示しながら図や文章などで表現し説明することができるようにすることが大切である」としている。

社会的事象の意味を考え表現する力を育てるためのICT活用を考えた場合、県内のICT環境が十分に整備されていないという課題もある。「平成25年度学校における教育の情報化の実態等に関する調査結果」（文部科学省）によると、下北管内では、教育用コンピュータは十分に整備されているものの、電子黒板やデジタル教科書の整備率が低いことが分かった（表2）。また、「児童のICT活用を指導する能力」で「わりにできる」若しくは「ややできる」と答えた人数の割合が全国及び青森県ともに低いことが分かった（表3）。

そこで、どの学校にも設置されているICTの有効活用と、児童によるICT活用を社会科の課題解決の手段として考えた結果、プレゼンテーションソフトを使って調べたことをまとめ表現することが社会的事象の意味を考える力を育てるために有効であると考え、本研究の主題を設定した。

表1 平成26年度青森県学習状況調査実施報告書 小学校 社会

評価の観点	設定通過率(%)	県(%)	下北管内(%)
社会的な思考・判断・表現	62.4	48.4	45.1
観察・資料活用の技能	66.7	64.6	62.7
社会的事象についての知識・理解	62.5	48.2	52.4
全 体	63.7	53.2	51.3

表2 市町村別コンピュータ設置状況 小学校

市町村別	教育用コンピュータ1台当たりの児童数(人/台)	普通教室のLAN整備率(%)	電子黒板のある学校の割合(%)	デジタル教科書の整備率(%)
全 国	7.3	83.9	83.0	42.2
青 森 県	7.2	45.3	65.4	31.7
む つ 市	6.3	8.4	46.2	38.5
大 間 町	7.0	90.0	100	50.0
東 通 村	3.8	100	100	100
風 間 浦 村	1.7	85.7	100	66.7
佐 井 村	2.7	0	0	0

表3 教員のICT指導力の状況 小学校

項 目	「わりにできる」若しくは「ややできる」	
	全国(%)	青森県(%)
A 教材研究・指導の準備・評価などにICTを活用する能力	81.9	77.6
B 授業中にICTを活用して指導する能力	72.3	64.2
C 児童のICT活用を指導する能力	68.0	64.0
D 情報モラルなどを指導する能力	79.6	72.8
E 校務にICTを活用する能力	77.3	71.4

## II 研究目標

小学校社会科の学習において、社会的事象の意味を考え、根拠や解釈を示しながら説明する力を育てるために、コンピュータなどの情報手段を活用して調べたことや自分の考えをICTを使ってまとめ、伝え合う活動を取り入れることが有効であることを授業実践をとおして明らかにする。

## III 研究仮説

小学校社会科の学習において、コンピュータなどの情報手段を活用して調べたことや自分の考えをICTを使ってまとめ、伝え合う活動を取り入れると、社会的事象の意味を考え、根拠や解釈を示しながら分かりやすく伝える発信能力や多様な表現方法が身に付くだろう。

## IV 研究の実際とその考察

### 1 研究の内容

#### (1) 情報教育について

##### ア 求められる資質

近年、急速なICTの普及とともに生活の様々な場面で情報化が進み、全ての国民が適切に活用する能力が必要になってきている。児童生徒にとっても例外ではなく、「ICTを活用した教育の推進に関する懇談会報告書（中間まとめ）」（文部科学省平成26年8月）によると、ICTを活用する意義として、「特に我が国の未来を担う子供たちには、発達段階に応じて、ICTに適切に触れながら情報活用能力を育成することが必要であり、学校教育においては各教科等の学習を通してその育成を図ることが重要である」としている。このことから、ICTの特徴を生かしながら、積極的にICTを学習に取り入れ、情報活用能力を育成していくことが必要であると考えられる。

##### イ 情報教育の系統性

情報教育については、発達段階を考慮して、学校全体として体系的に実施することが重要である。小学校学習指導要領総則では、「各教科等の指導に当たっては、児童がコンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段に慣れ親しみ、コンピュータで文字を入力するなどの基本的な操作や情報モラルを身に付け、適切に活用できるようにするための学習活動を充実するとともに、これらの情報手段に加え視聴覚教材や教育機器などの教材・教具の適切な活用を図ること」とある。小学校で身に付けた基礎的な情報活用能力が、中学校、高等学校の学習へとつながっていくことを考慮すると、ICT活用を積極的に取り入れながら、基本的な操作を確実に身に付けさせることが重要になってくる。特に、コンピュータを活用して必要な情報を収集・選択し、調べたことや考えたことを表現する情報活用の実践能力は、将来に渡って活用できるものである。したがって、本研究では、教科の目標達成の手段としてICTを活用するとともに、小学校段階での情報活用能力を考慮したものにしたいと考える。

#### (2) プレゼンテーションソフトの活用

##### ア 目的

小学校学習指導要領解説社会編では、学校図書館や公共図書館、コンピュータの果たす役割が大きいとする理由の一つとして、「児童一人一人が学習問題などを解決するために図書館やコンピュータなどを活用する過程で、必要な資料を検索・収集する能力、分析・選択する能力、検討・吟味する能力、加工・整理する能力などを習得することができる」とある。児童が調べたことや考えたことを表現するICTには、ワープロソフト、表計算ソフト、プレゼンテーションソフトなどがあるが、他の児童にわかりやすく一斉に伝える手段となると、プレゼンテーションソフトが適している。プレゼンテーションソフトを使って資料を作成する過程で、集めた情報を整理したり、総合して考えたりする活動が、社会的事象の意味を考え、根拠や解釈を示しながら説明する力を育てるために有効であると考え、本研究では、プレゼンテーションソフトの活用について取り上げるものとする。また、発表で終わるのではなく、話し合う場を設定することで、社会的事象の意味を考える力を育てたいと考える。

##### イ メリット

プレゼンテーションソフトは、調べたことを、文字情報だけでなく、図やグラフなどを加えて、分かりやすくまとめるができる。また、文字の修正も手書きに比べると容易である。これまでの授業実践で

は、調べたことを口頭で伝えることが多かったが、全体で共有するためには、教師が板書する必要があった。単元の終末に新聞作成を取り入れることがあったが、作成に時間がかかり、展示する以外の活用ができなかった。プレゼンテーションソフトは、発表を前提としているものなので、プロジェクタで投影することによって調べたことを全体で共有することができる。新聞作成よりプレゼンテーションソフトによる資料作成の方が短時間ででき、話合いの時間を設けることができると考えられる。

#### ウ 方法と留意点

資料作成の前段階として、インターネットによる調べ学習の時間を設定する。調べた後、どのような発表資料を作るのかイメージをもたせるために、教師が作成したものを提示することが必要である。また、課題解決につながるホームページを簡単に見付けることができるように、検索する言葉のヒントを与えたり、関係するホームページを示したりする。説明の文がホームページの引用のみにならないよう、わかったことをノートに記述させる。説明に必要な図やグラフをコンピュータに保存させるが、著作権の配慮から、どのホームページから得たものなのか記録させる。

資料作成に使用するプレゼンテーションソフトは、研究協力校の児童用コンピュータに導入されているPowerPointとする。プレゼンテーションソフトには様々な機能が含まれているが、時間内に作成を完了させるために、文字の入力と装飾、図の挿入など、最小限の機能を使用させる。資料作成の手順としては、ファイルの作成と保存、タイトルの作成、図の挿入、文字入力などである。また、発表時間を2分間に設定したことから、資料は2～3ページを目安にする。

#### (3) 発表について

発表の準備として、作成した資料のデータを事前に発表用コンピュータに保存しておき、黒板にはマグネット式のスクリーンを設置しておく。児童は、順番にプロジェクタで投影された資料を使って発表する。質問の場は設定せず、誰がどんな内容を発表したのかノートに要旨を記録させる。

#### (4) 話合いについて

話合いのテーマは、調べ学習と関連したものとする。初めに、前時に調べたことを短い言葉でカードに書き、黒板に貼る活動を行う。次に、カードのグループ分けをし、どんな名前を付ければよいか考えさせる。それは、調べたことを数個にまとめることで、話合いを効率的に進めるためである。また、グループ分けによって、特徴を捉えることができる。その後、グループ分けしたものの中から自分の考えを選び、理由を示してノートに記述してから話合いを進める。そこでは、自分の考えの優位性を述べたり、他の意見に対して質問をしたりしながら、社会的事象の意味を考えることになる。話合いの終末は、最終的にどの取組がよいと思うか、理由を示して記述させる。

## 2 検証授業について

### (1) 単元の構成

検証授業は、5学年「わたしたちの生活と食糧生産」の中の小単元「水産業の盛んな地域」を取り上げた。小学校学習指導要領解説社会編の指導計画作成上の配慮事項で、「児童一人一人が自らの問題意識をもち、学習問題に対して解決の見通しを立て、それに従って必要な情報を収集し、それらを活用・整理して問題を解決していく学習活動を構成することが大切である」とある。よって、前半に、魚を消費地に届けるまでの仕組み、水産業で起きている問題を取り上げる。後半は、「水産資源を守るためにどのような取組が行われているのだろうか」という課題についてインターネットを活用して調べた結果を発表し、話合いをとおして水産業の未来について考えさせる展開である。また、1～4時間目は、資料からわかることや社会的事象の意味を考えさせるために、簡易実物投影機とコンピュータ、プロジェクタを活用し、拡大提示した。(表4)

表4 小単元「水産業の盛んな地域」の指導計画

学習課題	主な学習内容	評価	I C T活用
①日本の水産業の特徴を考え、学習問題をつくろう。	水産業が盛んな理由を、自然環境の面から考え、水産業に携わる人々の工夫や努力について調べる学習問	水産業に携わる人々の工夫や努力について学習問題を立て、予想、学習計画を考え、表現している。	○簡易実物投影機 ○プロジェクタ ・水産業が盛んな理由を考える。

	題をつくる。	(思考・判断・表現)	
②魚をとるとき、どのような工夫をしているのだろうか。	長崎漁港と焼津漁港の漁業の種類や漁法を調べ、魚をとるときの工夫についてまとめる。	漁業の分類や魚をとるための漁法の違いや工夫があることを理解している。 (知識・理解)	○コンピュータ ○プロジェクタ ・各漁法の特徴や工夫を考える。
③水揚げされた魚は、どのようにして消費地に運ばれるのだろうか。	水揚げされた魚の行方を調べ、市場や加工場に送られることや輸送の仕組みについてまとめる。	漁港には様々な機能があり、新鮮なうちに消費地へ届ける工夫があることを理解している。(知識・理解)	○簡易実物投影機 ○プロジェクタ ・漁港の施設や水揚げ後の仕組みを考える。
④水産業では、どのような変化が起きているのだろうか。	漁業別の生産量や輸入量の変化を読み取り、水産業の現状と問題を考える。	水産資源の減少や輸入の増加などを関連付けながら資料を読み取ることができる。(技能)	○コンピュータ ○プロジェクタ ・グラフから水産業の問題を考える。
⑤水産資源を守るためにどのような取組をしているのだろうか。	インターネットを利用して日本各地で行われている水産資源を守る取組について調べる。	水産資源を守る取組について意欲的に調べている。(関心・意欲・態度) 水産資源を守る取組について、インターネットで必要な情報を集めることができる。(技能)	○コンピュータ ・水産資源を守る取組を調べる。
⑥調べたことをコンピュータでまとめよう。	水産資源を守るための取組と自分の考えをプレゼンテーションソフトでまとめる。	水産資源を守るための取組について調べたことをコンピュータを使ってまとめることができる。(技能)	○コンピュータ ・調べたことをプレゼンテーションソフトでまとめる。
⑦調べたことを発表しよう。	水産資源を守るための取組について調べたことを発表し合い、様々な取組の意味について考える。	水産資源を守るための取組について、その意味を考え適切に表現している。(思考・判断・表現)	○コンピュータ ○プロジェクタ ・調べたことを発表する。
⑧水産業の発展のために何に取り組んで行けばいいのだろうか。	これからの水産業で大切だと思うことについて話し合い、水産業の未来について自分なりの考えをもつ。	人々の工夫や努力によって食生活が支えられていることと水産業の発展を考え表現している。(思考・判断・表現)	○コンピュータ ○プロジェクタ ・話し合いの仕方を理解する。

## (2) 検証方法

研究の内容を基にして、検証授業を行った。実施期間は、平成27年9月1日～9月10日で、対象は、研究協力校の5学年16名である。仮説の検証については、児童の作成したプレゼンテーション資料、話し合いの内容、ノートの記事、アンケート結果の分析によって行った。

## 3 授業後の検証

### (1) 児童の作成したプレゼンテーション資料の考察

児童は、「水産資源を守るためにどのような取組をしているのだろうか」という学習問題に対して調べたことを、プレゼンテーションソフトを使って1時間でまとめた。ページ数は2～3ページ程度である。児童は、前小単元でもPowerpointでまとめる学習を行っていたので、文字入力や図の挿入などの操作は習得していた。しかしながら、ノートに記録した内容が不十分で、再度ホームページを閲覧するなど、調べたことを文章でまとめることに時間がかかっていた。全児童が、フォントのサイズや色を変え、見出しをつけることができていた。また、16名中14名の児童が図や写真を挿入し、5名の児童はグラフを貼り付けていた。

児童Aは、養殖と栽培漁業について調べ、取組の概要をまとめている。両者の違いは、海に放流するかしないかだが、その区別ができています。自分の考えで、初めて養殖と栽培漁業の取組を知った驚きを述べている。図や写真を挿入して、つくり育てる漁業の説明を加えると、さらによかったのではないかと考えられる(図1)。

児童Bは、魚つき保安林について調べ、魚が増えるまでの仕組みを短い文章で分かりやすくまとめている。木を植えることよって魚を増やすことにつながるという説明が、他の児童に驚きを与えていた。自分の考えの記述から、木を植えることの魚以外への影響も考えていることがわかる(図2)。

児童Cは、3種類の水産資源を守る取組を簡潔にまとめている。関係する図を挿入しているもので、説明が分かりやすくなっている。ただし、自分の考えの記述がなかった(図3)。

児童は、様々な県のホームページを調べ、複数の取組をまとめていた。児童の調べた

ことを分類してみると、「制限」については9名、「つくり育てる漁業」については7名、「自然環境」については6名であった。最後に「自分の考え」を載せていたのは、4名と少なかった。学習問題の「水産資源を守るためにどのような取組をしているのだろうか」に対する答えは、取組の説明となるため、それに対する自分の考えは答えづらいものであったと考えられる。「水産資源を守るためにどんな取組をすればよいだろうか」と設定すると、自分の考えを述べてその根拠として「この取組をするとこんな効果が表れる」という説明ができることになる。また、「授業以外では許可なく図や写真を載せることができない」と著作権について触れたが、引用したホームページのタイトルを載せている児童がわずかだったため、指導が不十分だったと考えられる。

## (2) 話し合いの考察

調べた取組をカードに書かせたが、一人で複数の取組を調べていたので、カードが黒板の大部分を占め

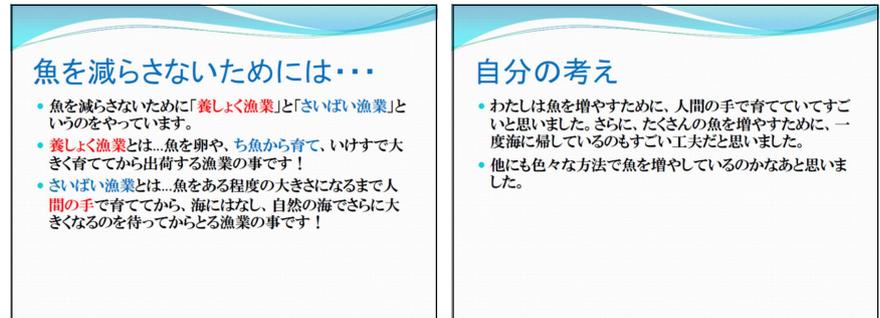


図1 児童Aの作成した資料



図2 児童Bの作成した資料



図3 児童Cの作成した資料

ることとなった。児童が意見を出し合って、グループ分けと名前が決定した。グループの名前は、取組の特徴から「つくり育てる漁業」「自然環境」「制限」と、ほぼ教師が予想していたものが話し合いから出てきた(図4)。

次に、上記の三つの取組の中から大切だと思うものを一つを選ばせ、その理由をノートに記述させた。調べた取組と別のものを選んだ児童が9名と多く、発表により視野を広げたことがわかる。

話し合いでは、どの児童も理由を述べる事ができた。つくり育てる漁業の理由として「とるだけだと魚の数は減るから、ほかの取組は時間がかかるから」、自然環境の理由として「環境が悪いと魚のすみかもえさも減るから、木を植えると海に栄養が行き渡り魚が増えるから」、制限の理由として「簡単に魚を増やすことができるから、産卵できる魚がいると魚が増えるから」などという意見が出た。これらの意見は、調べ学習と発表で得た知識が生かされていた。また、三つのグループの中から一つを選ばせることで、話し合いが焦点化できた。「つくり育てる漁業」が大切だという児童が8名と多かった。それは、漁獲制限や自然環境を整える取組より「つくり育てる漁業」が魚介類の生産量を高めるイメージとつながりやすかったためと考えられる(図5)。

話し合いのまとめとして、最終的な自分の考えを記述させた。最初の意見から変わった児童は4名であったが、話し合いによって考え直しをした結果の表れだと考えられる。地域や魚介類の種類によって適している取組は変わってくるが、児童が三つの取組を比較し、総合的に考え、日本の水産業にとって大切だと判断する過程が、社会的事象の意味を考える力を育てることにつながっていると考えられる。

### (3) ノートの記述内容の考察

1時間目と8時間目に、「水産業に携わる人々にはどんな願いがあり、どんな工夫をしているのか」について記述させた。1時間目は、学習前なので、「たくさんの魚をとりたい」「魚を好きになってもらいたい」「おいしい魚を食べてもらいたい」という自分の経験から予想して考えた記述がほとんどである。

8時間目の記述では、水産資源を守るための取組に触れるなど、調べ学習や話し合いの意見が生かされた記述が多くなっている。

児童Dは、資料には「制限、自然環境、つくり育てる漁業」の取組についてまとめていた。話し合いでは、「自然環境」を守ることが一番大切だという考えであった。まとめでは、水産業に携わる人の願いとして「魚が減らないようにしたい」「きれいな環境を守りたい」という内容を記述している(図6)。

児童Eは、資料には「小さい魚をとらないようにする」ことをまとめていたが、他の児童の発表から「栽培漁業」が大切だという考えに至り、まとめに記述している(図7)。

児童Fは、資料には「魚つき保安林」についてまとめていた。話し合いでも「自然環境」を守ることが一番大切だと主張していた。まとめでは、他の児童の意見も取り入れて、養殖や制限についても触れている(図8)。

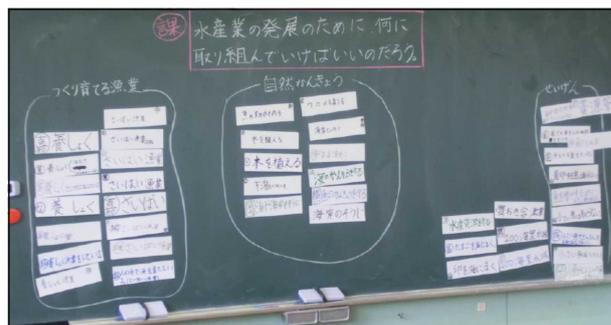


図4 取組のグループ分け

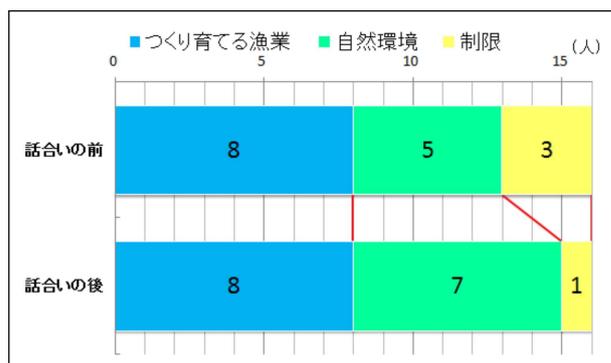


図5 大切だと思う取組

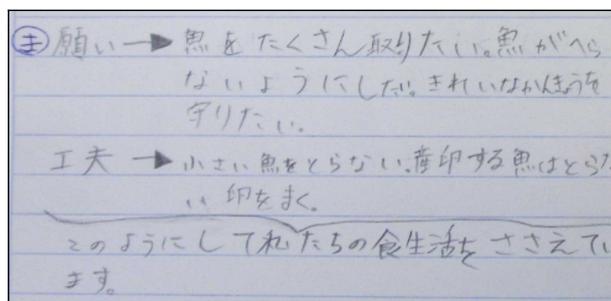


図6 児童Dのノート

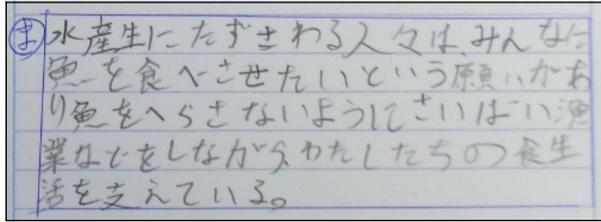


図7 児童Eのノート

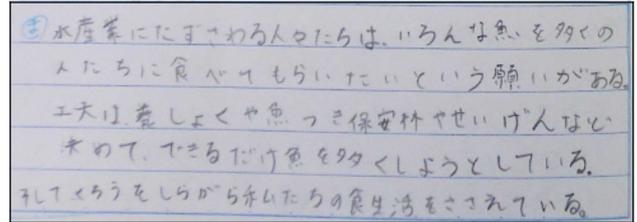


図8 児童Fのノート

その他、まとめの記述には、「魚をとりすぎるといなくなるから、栽培漁業に取り組んだり、海の環境を整えたりして、ぼくたちの食生活を支えている」「水産業にとって一番大切なことは、魚を減らさないこと。そのために、制限をしたり、海の環境を守ったりしている」「小さい魚をとらないことや、魚を育てることがいいと思った」などという記述が見られた。調べ学習では得られなかった知識が、他の児童の発表から得られ、かつ話合いでそれぞれの取組の長所や短所を考えたことで、水産資源を守るために様々な取組をしているという社会的事象の意味を考えるようになったと言える。しかしながら、「何のために水産資源を守るのか」という問いを設定することで、現在の取組が未来の自然環境や食生活を守ることに繋がっていることに気付かせることができたのではないかと考えられる。

#### (4) アンケート結果の考察

小単元の学習の前後に、社会科の学習に対するアンケート調査を行った(図9)。「社会科の学習は好きだ」という項目で「そう思う」と答えた児童が増加した理由は、インターネットでの調べ学習やプレゼンテーションソフトでまとめる活動が意欲・関心につながったことが推測される。児童は、いろいろなホームページを閲覧し、工夫しながら資料を作成していた。また、コンピュータの操作方法を教え合う交流の姿も見られた。

「理由を述べて発表することができる」が向上した理由は、自分の考えの根拠として調べ学習で得た知識を生かして話合いに参加することができたためだと考えられる。単元終末の話合いでは、理由を示しながら考えを述べるのが苦手な児童が、積極的に発表する姿も見られた。

「自分の考えを資料などを使って説明することができる」の項目が向上した理由は、全員に発表する機会を与えたことによると考えられる。事前練習の時間が少なかったにもかかわらず、児童は内容を整理して発表していた。調べたことを伝えたいという思いと、資料を完成させることができた達成感によるものだと考えられる。

「学習したことを基に自分の考えをまとめることができる」の項目が向上した理由は、1時間ごとの学習のまとめで、自分の考えを記述させたことによると推測される。また、単元終末の話合いによって、考え直しをしたり、他の意見を取り入れたりしながら、自分の考えを整理してまとめることができたためだと考えられる。以上の結果から、社会科の学習にICTを活用することで、児童の表現に対する意識が高まったと言える。

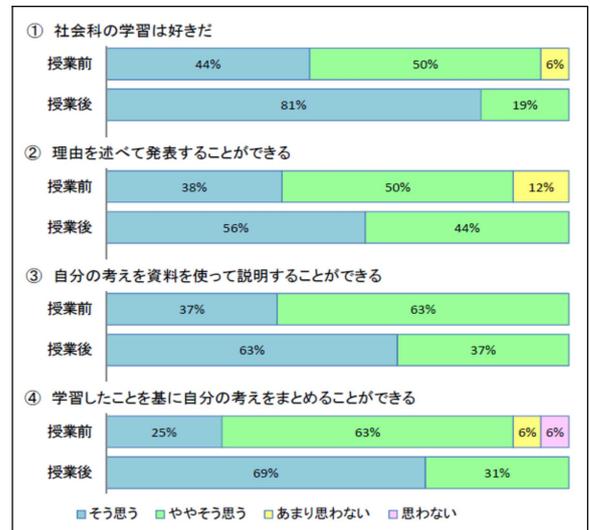


図9 アンケート結果

## V 研究のまとめ

本研究では、県学習状況調査実施報告書社会科の課題である社会的な思考・判断・表現に着目し、社会的事象を考え表現する力を育てるための指導法の研究を行った。今あるICTの活用を考え、コンピュータのプレゼンテーションソフトを活用する授業展開を考え、児童は、調べたことをまとめる過程で社会的事象の意味を考え、図や写真を挿入して工夫しながら資料作りをすることができた。また、全員が発表することで、多様な考えを全体で共有することができた。新聞作成より時間短縮や書き写す作業の軽減が図られ、話

合いの場を設定することができ、その話し合いも根拠を示しながらのものになった。以上のことから、プレゼンテーションソフトを活用した学習は、社会的な事象の意味を考え表現する力を育てるために有効だったと言える。また、プレゼンテーションソフトでまとめることができるようになると、ワークシートや新聞などと同様に、表現の手段の一つとして選択することが可能になると考えられる。

プレゼンテーションソフトは、今後、デジタルカメラで撮影した写真を挿入したり、自分で作成したグラフを挿入したりするなどの活用もでき、他教科や総合的な学習の時間での活用も可能である。また、ファイル操作や、文字の装飾、図の挿入などの身に付けたコンピュータ操作の基本的なスキルは、中学校や高等学校の情報活用能力につながると考えられる。

## VI 本研究における課題

総合的な学習の時間にプレゼンテーションソフトを使ってまとめ発表する事例は多数あるが、本研究では、教科の目標を達成するための活用を取り上げた。教科での活用を考えた場合、プレゼンテーションソフトでまとめるのが適切な単元かどうかを判断する必要がある。また、プレゼンテーションソフトによる資料作成を単元の中に組み込む場合、児童が調べる必然性を感じる学習問題を設定することが重要になってくる。多様な内容や考えが期待できない学習問題では、プレゼンテーションソフトを使う効果が低いと考えられる。

資料作成が教科・領域の目標達成の手段であって目的でないことを考慮すると、何のために資料を作成するのか、目的を明確にする必要がある。本研究では、水産資源を守るための取組について資料を作成させたが、その意図を児童に感じさせる点が弱かったのではないかと考えられる。また、発表後に相互評価の場が設定できると、表現力の向上に寄与できると考えられる。

### <引用文献・URL >

- 1 青森県教育委員会 2014 『平成26年度 学習状況調査実施報告書』
- 2 文部科学省 2008 『小学校学習指導要領解説 社会編（平成20年8月）』
- 3 文部科学省 2014 『平成25年度 学校における教育の情報化の実態等に関する調査結果』  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/zyouhou/\\_icsFiles/afieldfile/2014/09/25/1350411\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/_icsFiles/afieldfile/2014/09/25/1350411_01.pdf) (2016.2.1)
- 4 文部科学省 2014 『ICTを活用した教育の推進に関する懇談会 報告書（中間まとめ）』  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/26/08/\\_icsFiles/afieldfile/2014/09/01/1351684\\_01\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/08/_icsFiles/afieldfile/2014/09/01/1351684_01_1.pdf) (2016.2.1)

### <参考文献・URL >

- 文部科学省 2010 『教育の情報化に関する手引』  
文部科学省 2011 『評価基準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料 【小学校 社会】』  
澤井陽介 2015 『社会科授業づくりトレーニングBOOK 話し合い・討論・学習のまとめ・評価問題づくり編』 明治図書出版

### <商標>

PowerPointは、マイクロソフトコーポレーションの登録商標である。